「天理教」教理の虚偽と真実への復元

①≪『教祖おおせには』 十二≫　教祖、おおせには 「そのときには　昼は晴天で、そよそよ風　雨は夜に降って、月六斎。／　夫婦のなかには　男の子一人、女の子一人ずつ授ける。　あとは願いどおり。／　働きは、昼まで**働いて**　昼から先は、よふき遊びや」と。「註」 高井直吉先生のお話のなかから　（高野友治著.P30.2013.私家版）

②≪ 『稿本天理教教祖伝逸話編』 29　三つの宝≫　ある時、教祖は、飯降伊蔵に向かって、「伊蔵さん、掌を拡げてごらん。」と、仰せられた。伊蔵が、仰せ通りに掌を拡げると、教祖は、籾を三粒持って、「これは朝起き、これは正直、これは**働き**やで。」と、仰せられて、一粒ずつ、伊蔵の掌の上にお載せ下されて、「この三つを、しっかり握って、失わんようにせにゃいかんで。」と、仰せられた。伊蔵は、生涯この教を守って通ったのである。

③≪ 『稿本天理教教祖伝逸話編』 111　朝、起こされるのと ≫　教祖が、飯降よしゑにお聞かせ下されたお話に、「朝起き、正直、**働き**。朝、起こされるのと、人を起こすのとでは、大きく徳、不徳に分かれるで。陰でよく働き、人を褒めるは正直。聞いて行わないのは、その身が嘘になるで。もう少し、もう少しと、**働いた上に働く**のは、欲ではなく、真実の**働き**やで。」と。

④≪ 『稿本天理教教祖伝逸話編』 197　働く手は≫　教祖が、いつもお聞かせ下されたお話に、「　ー前略ー　この屋敷に居る者も、自分の仕事であると思うから、夜昼、こうしよう、ああしようと心にかけてする。我が事と思うてするから、我が事になる。ここは自分の家や、我が事と思うてすると、自分の家になる。陰日向をして、なまくらすると、自分の家として居られぬようになる。この屋敷には、働く手は、いくらでもほしい。働かん手は、一人も要らん。」と。又、ある時のお話に、「**働く**というのは、**はたはたの者を楽にするから、はたらく**(註、側楽・ハタラク)**と言う**のや。」と、お聞かせ下された。

左の四つの文は、教祖が「働く(き)」について話されたものとされている。当然のことかもしれないが、どれも人間が体を動かして仕事をしたりする意味である。ところで、「おふでさき」にも「はたらく(き)」という言葉がある。こちらは「にち／＼月日はたらくで」といったような「神のはたらき」の意味で使われている。左の用例とは全く意味が違うのである。

江戸時代の思想家安藤昌益の著作の中に「感」という字に「はたらき」とルビを振ったものがある。「感」は本来の意味は「神の感応をうる」ことで、これは教祖の「はたらく」の意味と共通する。

以前、天理大学主催の一般向けの教理講座で、ある先生が教理の真偽について玉ねぎの皮を譬えにして、一枚一枚はがしていったら何が残るだろうかというようなことを言われたのが印象に残っている。

私が思うにたぶん何も残らない。ただ、教祖の言葉そのものは「おふでさき」や「みかぐらうた」として残っているのだから、なぜ教祖本来の教えが曲げられたのかを考えることによって、教祖の教えそのものに近付くことはできるのではないかとも思う。

そこで今回は、教祖の教えが曲げられていった理由と、本来の教えへの可能性を考えてみた。

「はたらく」の意味を確かめる。

まず、「はたらく」について考えてみよう。

現代語では、仕事をする、労働する」意だが、古語では、動く」意であった。

はたら・く【働く】『自四』①うごく。宇津保蔵開下「鯛・鯉は生きて―・くやうにて」。著聞二〇「其の中にへしこめて、―・かぬやうにおしおほひてけり」。平家二「聖を追出(ゆついし)せんとしければ…またくいづまじとて―・かず」②精神が活動する。平家四「神慮も動き、太政入道の心も―・きぬらんとぞ見えし」。日葡「コロノハタライタヒト」「キノハタラカヌヒト」③精出して仕事をする。方丈記「常に歩き、常に―・くは養性(ようじ)なるべし」。「よく―・く人だ」④他人のために奔走する。傾城禁短気「亭主日比(ひごろ)懇にする馴染甲斐には、こんな所を―・け」⑤効果を表わす。作用する。一代女二「その銀(ねか)―・かずして居喰(くい)の人は思ひもよらぬ事」。「引力が―・く」⑥(文法で)語尾などの語形が変化する。活用する。「四段に―・く」⑦(他動詞的に)(悪いことを)する。「盗みを―・く」

『広辞苑』

古語の用例と現代の用例が示されている。

はたら・く【働く】自力四 ①動く。「ゐよゐよ、蜻蛉(とうよ)(略)さてゐたれ、―・かで」〔梁塵秘抄四三八〕「脣(くちびる)ばかり―・くは、念仏なめりと見ゆ」〔宇治拾遺二・九〕②動いて用をなす。効能を現わす。「心の―・かぬゆゑぞ」〔浮・一代男〕③励む。ほねおる。「この間は精を出して―・いたによって」〔狂・三本柱〕④動揺する。「あかで別れし女にこのすまひを見えて候へば(略)心も―・き候ひぬべし」〔平家一〇・横笛〕

『角川古語辞典』

はたらきもの【働き者】せっせと仕事をする人。

はたらく【働く】『四自』①目的にかなうような結果を生ずる行為・作用をする。仕事をする。「工場で―」㋺精神が活動する。「勘が―」「知恵が―」㋩よくない事をする。「盗みを―」「乱暴を―」▽㋩は他動詞。㋥作用する。「引力が―」▽㋥は擬人(ぎじん)的とも見られる言いまわし。②〔文法〕活用する。「四段に―」▽「活く」とも書く。③じっとしてはいないで動く。「おのれ―・かば射殺してむ」(今昔)「またも慕ふことあらば心も―・き候ひぬべし」(平家)▽もと、体をぱたぱた動かす意。

はだれ まだら。まばら。

『岩波国語辞典』

引用した四つの「働き」に関する話は、その量の違いはあっても、「仕事をする」という意味の「はたらく」である。それに対して、「おふでさき」のそれは古語辞典が示すところの「動く、効能を現す」という意味である。逸話編等の話が本当のこととすれば、教祖は日常会話では現代的な意味で、文字の時は古語的な意味で使っていたことになる。それはともかくとして、「おふでさき」の教理理解という点から、古語的な「はたらく」について考えてみよう。

「おふでさき」の「はたらく（き）」の用例　28例

5号48.　それからハ神の**はたらき**なにもかも　ぢうよじざいをしてみせるでな
49.　しんぢつの神の**はたらき**しかけたら　せかいーれつ心すみきる
14号15.　これからハにち／＼**月日はたらく**で　とんなしごとをするやしれんで
16.　このよふにかまいつきものばけものも　かならすあるとさらにをもうな

問題は、彼（安藤昌益）がその著作の本文でときおり用いる「感（はたらき）」という用法であり、恐らく彼以外には見られない、このユニークな試みの意味するものである。

ここで「自然は生きてハタライテイル」という命題を昌益自身の原文にもどすなら、「自然は、始めも無く終りも無く、自（ひと）り感（はたら）く」（『統道真伝』）、「自然活真、自感」（『自然真営道』「大序」）であるが、この「感」は、伝統的にも、また昌益にあっても、けっして「労働」を意味しない。たとえば漢方医学最古の古典『黄帝内経・素問』では、「天の邪気感ずるときは則ち人の五臓を害す」（陰陽応象大論）といわれるように、もともと自然界に潜在する邪気が、ある条件のもとで動き出し、活動し、働きかけること、つまり「発動」を「感」と呼ぶ。それは漢方医学独得の用語である。昌益はこの用法にのっとって、自感、感発、発感などといった表現を用いる。一方、白川静はその『字統』において、この文字の語源を**「神の感応をうる意」**とする。すなわち、人間の祈りに対して神の心が動き、祈りに応えるの意である。神にせよ、人にせよ、その心が動くためには、何らかの働きかけが前提とされる。「応」も、神意への問いかけに対する（神の）応答である（同上）。とすると、感と応とはほとんど同義である。「感」は能動と受動という、相反した意味をもった両義的概念なのである。
（『労働の終焉』P166安永寿延.農文協.1985）

「はたらく（き）」は、「おふでさき」に28例ある。それらはほとんどすべて、「神のはたらき」を意味している。「神が動いて用をなすこと」という意味である。教祖が使われる「はたらき」は、本来の意味である「動き」そのものなのである。

左の文は、安藤昌益が「感」という字に「はたらき」とルビを振っていたことについての解説である。これを読むと、「はたらく」について教祖との共通性が考えられるのではないかと思う。

「おふでさき」の「はたらく」という言葉を「神」との関係で見ることによって、本来の教祖の思いに近づけるのではないだろうか。

【デジタル大辞泉】
〔安藤昌益〕［1703～1762］江戸中期の社会思想家・医者。出羽の人。封建社会と、それを支える儒学・仏教を批判。すべての人が平等に生産に従事して生活する「自然の世」を唱えた。著「自然真営道」「統道真伝」など。

教祖本来の教えを求めて

現在の「天理教教理」といわれているもので、教祖の教えた内容で伝わっているものはほとんどない。それは、逆にいえば、教祖本来の教えを復元するという大きな可能性が存在することでもある。ここでは、それをまとめてみました。

教団解釈	教祖の教え	変えた理由	根拠、参考文献	教理研究の可能性
天理王	てんりんおう	神道直轄六等教会の許可を得るため	「天理」は明治18年から使用、それ以前は「天（転）輪」。「親神称名私考」（『天理教学研究21号』）	仏教等で語られる転輪王思想などとの比較が可能になり、他の宗教思想などとのつながりが生まれる。
陽気ぐらし	陽気づくめ	「陽気づくめ」が社会主義を連想させるためか？	「陽気づくめ」は3原典とも用例がある。「陽気ぐらし」は「おさしづ」のみ。大正6年4月号の「みちのとも」記事から「陽気ぐらし」が天理教の看板になった。	陽気ぐらしが個人的なものとすれば、陽気づくめは皆の幸せ、社会全体が幸せになる道の希求が求められる。
出直し（死）	しりぞく とまる（15-53） ちる（15-67）	生れ変りの「因縁」教理のため	「みちのとも」の「出直し＝死」の用例は大正3年から。「おさしづ」は「死＝出直」と表記しているが、その出版は昭和2年で、書取原稿は公表されていない。他の記事でも疑問点があり、修正の可能性が否定できない。	「おふでさき」で死を意味する「（神が）しりぞく」から、教祖の死のイメージが考えられないだろうか。
ひのきしん（勤労奉仕）	ひのきしん（本来意味不解明）	無給労働の正当化（教内的意味）	『新宗教と総力戦』「第4章〈ひのきしん〉の歴史」 「ひのきしん叙説」（『諸井慶徳著作集下』）	陽気づくめ社会でのあるべき体や心の動かし方についての言葉が「ひのきしん」であると仮定して、その意味を考えられないだろうか。

教団解釈	教祖の教え	変えた理由	根拠、出典	教理研究の可能性
貸し物、借物（借り賃払え）	貸し物、借物（平等）	お供えの根拠とするため	「おふでさき」。「かしもの、かりもの」の前後の歌を含めて読めば、平等を説いている。（13－45～47など45.高山にくらしているもたにそこに　くらしているもをなしたまひい46.それよりもたん／＼つかうどふぐわな　みな月日よりかしものなるぞ47.それしらすみなにんけんの心でわ　なんどたかびくあるとをもふて）	教祖の教えが平等に基づいていることがよりはっきりする。
肥のさづけ（灰、土、糠3合づつで肥8駄分）	こえのさづけ（本来意味不解明）	まじないによる金儲け	「おふでさき」（4－51. こへやとてなにがきくとハをもうなよ　心のまことしんぢつがきくなど）では、「心の真実」の問題としている。	江戸時代から始まった金肥の使用は土地の生産性（収穫量）を高めることになったが村民の中に貧富の差を生じる原因にもなった。その辺の問題を考えるヒントになるのではないか。
真柱（真之亮）	真柱（こかん？）	世襲の正当性	「おふでさき3－8. しんぢつに神の心のせきこみわ　しんのはしらをはやくいれたい」からは、真之亮とは考えにくい（この時、真之亮は数えで9歳）。 教祖が「真柱の真之亮やで」といった話は『正文遺韻』（昭和12年）に出ている。ただ、この部分だけは昭和4年発行の『増野鼓雪全集第5巻』にも出ている。2冊のこの部分はいくらか文章が異なる。	「おふでさき」3～11号の主役は本来ならば「こかん」である。しかし、教祖の思いとは違って、こかんは明治8年に没してしまい、「おふでさき」解釈でもその影は薄い。 教祖が「真柱」として期待していたのは（こかん）であるとして「おふでさき」を読むと非常に分かりやすくなる。

教団解釈	教祖の教え	変えた理由	根拠、出典	教理研究の可能性
いんねん （生まれ変わり）	いんねん （元の因縁）	差別的旧来宗教の教理の維持	「おふでさき」（1－6. きゝたくバたつねくるならゆてきかそ　よろづいさいの**もとのいんねん**）	〔14－25. 月日にわにんけんはじめかけたのわ　よふきゆさんがみたいゆへから〕という元の因縁から、「おふでさき」に記されている元始まりの話を読み直すことが必要ではあるまいか。
貧に落ち切れ	中山家没落	没落の正当化と献金の強制	「三町程所有致居・・・微運ニシテ追々損失ヲ生シ・・・三反余リ之耕地ヲ残シ・・・」（明治14年丹波市分署宛手続上申書『復元30号』P239）	幕末という経済的な上下動の激しい社会で、中山家自身の経済的体験から、みかぐらうたやおふでさきの内容が生み出されてくるという視点からの思案もできるのではないか。
たまえの出生 （まつえの子） （7-72. なわたまへはやくみたいとをもうなら　月日をしへるてゑをしいかり）	たまえの出生 （こかんの子） （7-65. このたびのはらみているをうちなるわ　なんとをもふてまちているやら）	「おふでさき」の現状肯定的解釈、中山家世襲の正当性	「小寒殿は明治8年6月末に至って流産せられてから・・・」「小寒子略伝」『増野鼓雪全集22』P24。 明治8年出生とされている男児は明治11年出生（『復元39号』P68）。	現状肯定的に「おふでさき」を解釈する事例は、1号65の「ハかきによほふ」（若き女房）⇒「まつえ」とされているが、「こいそ－山中忠七の娘－忠七に断られた」説あり。3号1「建物を取り払え」では、秀司達は実際に門屋を建て、実際の建築の話にした。本来は「高山の説教」を取り払えの意味。 「おふでさき」本来の意味解釈が可能になる。